

福岡

福祉活動専門員の

# ま な こ

社協活動前進のために

No.16 昭和57年9月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 ひかり共同作業所



## 人とのふれあいに感動

高校生ボランティアアワーワークキャンプから

柳川市社協 高橋

柳川市社会福祉協議会では、いままでの福祉協力校とのいきづまりの状況を、打破し、高校生の情熱と行動力と新鮮なアイデアを出し合い、実践活動を進める場を作るために、「高校生ボランティアワークキャンプ」を八月に四日間開催した。

これは社協のプログラムを、こなすのではなく、四月より運営委員会を設けて、高校生自らが、企画して運営するものである。

高校生が持っている感性は、すばらしいものがあり、参加者の声を報告書の中にみると、どきどきさせられる場面は多くあった。

たとえば、障害を持った子供とのふれあいの中で「同じ人間」という実感を得ている人、老人ホームのおじいちゃん、おばあちゃんに多くのものを学んだという人など。

ひとり、ひとりの発言が、いままでの福祉へのとらえ方への批判であり、反抗にも受けとられるような気がした。

当初、四日間とも、日帰りの予定だったが参加者の想いはおさまらず一泊ではあるが設定したことにより、強い連帯意識が生まれ、それぞれが、四日間を、きちんとかみしめてくれたことがいちはんの成果だった。

今後の課題として、ふだん係わりのある学校からしか参加がなかったので運営委員会を設定する段階から、考慮しなければ、本当の意味での広がりが出てこないのではと思われる。

# 「残された能力」

と

## ボランティア活動

障害者の、障害者による、

障害者のためのボランティア活動

ボランティア入門講座のアンケートを集約して、「アレッノ」と思っておもわずペンを止めた。

(問) 介助教室についてお尋ねします。

(答) 盲人ガイド・ヘルプで一番大変だったと思ったことは……。

(問) 盲導犬

記入した方は、二十八歳の女性のろうあ者である。意味がわかりますか。

「目の不自由な方は盲導犬にひかれて街に出られる。私は耳と口が不自由だけれども、人間だから犬よりは役に立つことができる。」

実はこんな意味あいでも記入されたそうです。(アンケートの答としては若干ずれるのですが……)

同じ方が、(問)「ボランティア入門講

座を受講されて、障害児の方への考え方が変わりましたか」について、「変わった」「具体的にー私の耳が不自由なですが、下肢や上肢が障害者の人達の同じように助け合いに進んで行きたいと思います。ー原文のままー」と答えてありました。余談になりますが、ろうあ者の方の文章は、手話が単語の連続という方式なので、どうしても助詞の使い方がまずく、ろうあ者の方への文章研究会というようなものが必要なのではないかと思えます。

少し前置きが長くなりましたが、障害をもっている方が、自己に残された能力を活用し、障害児の方へボランティア活動することはどういうことなのか、ここで少し考えてみることにします。

●ボランティア活動をする障害者の動機について

障害者自身によるボランティア活動の動機としては、「自らが障害をもっていたため、今まで多くの方から助けられて生きて来た。そのお礼として、せめて自分で役に立つことなら……」が共通していると思う。

これは、最近一部の方が言っている第四番目の障害——「体験としての病」の正反対の立場である。

ただ、ボランティア活動をしたいという気持ちがありながら、それこそ障害ゆえにできないという方も多いと思われる。

●ボランティア活動をする障害者の立

場について

まず対象となる障害児の方より障害程度が軽い方(語弊があるとも思いますが)が多い。

実はこのことが、ボランティア活動を受け入れる側、特に保護者の心理に微妙な影響を与えているのである。

というのは、同じ脳性マヒという障害でありながら、一方はある程度障害を克服してボランティア活動をし、かたや一方は寝たきりでボランティア活動を受けている。

こういう現状を眼の前にとると、親として「せめてこの子もあれ位の障害程度であれば……」と陰でため息混じりに、ついグチをこぼす。

次に、障害者による障害者のためのボランティア活動には一定の限界があると思う。

特にこの限界が如実に現れてくるのは、「移動」の場面である。

寝たきりの障害児者や車椅子の成年障害者の移動は、ろうあ者をのぞいて一般の障害者では無理であろう。(なにも障害者へのボランティア活動だから、全てのボランティア活動ができないわけではないなどと言うつもりは毛頭ない。)

そうであれば、障害者の障害児者へのボランティア活動は、話し相手や食事の世話等に限られてくるのではないか。また、その場面にこそ、障害を乗り越えてきた障害者の体験が生きるのではないかと思える。

●専門員として、障害者ボランティア

にいかにかかわるか  
(この部分については、障害者ボランティアに接して日が浅いので、問題点の指摘だけにとどめたい。)

まず考えなければいけないのは、障害者の方のボランティア活動の展開できる場所の設定である。

思うに、障害者の方がボランティア活動を始めるとき、いきなり一対一の関係をつくるのではなく、小グループの障害児者の集りを導入部分として考える方がよりベターであろう。しかも、そこに専任の指導員がいて適切な指示を与えられればさらに良いと思う。

次に、ボランティア活動をする障害者の生活の面についてである。

ボランティア活動をする障害者にとって、活動することが社会的自立の第一歩である。しかし、彼らにとってはやはり生活面で自立したいという希望がある。これはなにもボランティア活動をする障害者だけのものではないが、やはり考えなければいけない問題だと思ふ。

紙面の関係でこの辺でペンを置きますが、とにかく、障害者による障害者へのボランティア活動を特異現象と考えるか否かは、もう少し事例を集める必要があると思う。

ろうあ者から、「目の不自由な方が四つ角で困っているとき、ろうあ者はどんな手助けができますか」という問いに、専門員のあなたはどうか答えますか。

# しあわせについて

皆さん、精神的にも肉体的にも本当に「頭が痛い」「事つてありますか？」

夏に恒例の『障害児のふれあいキャンプ』を実施し、その後、キャンプに参加したボランティアに対して「あなたの障害者観は？」という意識調査を行いました。

対象ボランティアは、一名を省いてボランティアの経験が今回のキャンプが初めての人はかり。この事を含めて実を言うと、未熟な私は、「障害者はいかにかわいそうだ」とか「障害者に何かもつとしてあげたい」、行政は社協は何をやつてるんだ」という様な答えがかえつてくるだろうと予測したのです。

年齢が中学生から二〇歳前の若い年齢層と、ボランティア経験が初めてという事から、一般的な田舎のオジサンオバサンの考え方と同じ様な答えを予測したわけだけども、みごとにハズレてしまったのです。

皆が、口裏を合わせたように、「障害者といつても、何も自分が好きで障害者と呼ばれるようになったんじゃない。私達は、もつと障害について考え、障害者は、もつと社会に自己主張していく様な環境を作つていかなければならないと思う。私達は、その為にも協力していきたい。」という答え。

——私は、自分が情けなくなりま

した。この「ふれあいキャンプ」で障害児とのふれあいによつて、ボランティアの考え方が変わった事もあるだろうけれど、年齢や経験年数によつて、ボランティアの意識を判断しようとした、あまい自分。

協力者が無いと言つては、いかにも自分だけが背伸びして頑張つてると思つていた、おもしろい自分の自分。

「行政は、福祉・ふくしと口ばかりで何をやつてゐるんだ」と、自分が進んでやろうとはせずに、他に責任を転化させていたのは、なによりも、この私だつたのではないか。協力者になつてくれる人物が、仲間が、ちゃんといふではないか、どこに目をつけてるんだ！（もともと、糸くずがついてる程度の目だ……）

私は今、「社協の職員としての自分は何だつたのか」、「今まで、他の社協に負けまいと頑張つてきた事は何だつたのか」、「もう一度、私の障害者観を含めて『共に生きる』『共に学ぶ』という原点から問い直してみなければならぬ時期にきているようです。

要するに、私、本当に頭が痛くなつてスランプ気味なのです。

皆さん、今さら三年目にして何を言うんだと笑われるかもしれませんが、「しあわせ」つて何ですか。

世界中のみんなが、しあわせになつたがつてゐるのに、誰もが他人のしあわせを阻みたがつてゐるのではないだろうか。心の中のどこかに悪魔的な性質があつて、全てが自分中心に動いてゐる様な錯覚におちいつてゐる。そして、自分の夢や目的が、走馬燈のごとく広がつてゆく。——でも、それは、唯、今の自分が現実を押し流されてゐるだけなんだ、という事に気がついたんです。

やつと今、私は新たに歩きはじめようとして決心しています。「しあわせ」が何なのか知りたいのなら、どんなに苦しい環境にも押し流されないように、まるごと自分をしよい込んでいきたい。そして、いつも問いかけていきたい。「しあわせですか、しあわせですか、あなた いま……」

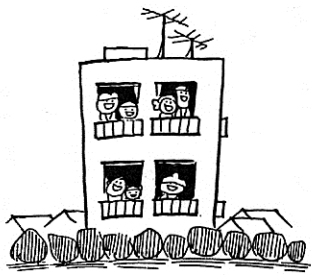
## ある日の出来事

九月十日、今日は「まなこ」の編集委員会が開かれてゐる。この二、三日前に県社協の某氏からそつけない電話連絡を受け、貴重な時間？をつぶして出席したが、気まじめな編集委員長より紙面が埋まるよう何か書けといわれ、会議室の窓から初秋の色づいた山々を眺めながら六年間の社協活動で残つたものを考えてみたが、部分的には、ある時の発想で、ある人の影響で、わずかの工夫を凝らして実施した数回の事

業（断続的活動）の痕跡だけである。そして個々の事業の繰り返し、地域住民への働きかけ、関わりの頻度が地域福祉の住民参加（断続的活動）に結びつくのだという楽観的態度であつた。社協活動の根底とする住民の主體的参加とやらには、ほどとおい。

個々の事業実施において役割分担という美名のもとに、割当参加という実態に助けられてゐる。また、私たちが取り組もうとしてゐることは、私たちの生活で「生き死に」に直結する程、真剣な問題には後ずさりしてゐるし、それに応えられる体制が、社協にも私にも全くといつていい程、無いのではなからうか。故にすべて「ある日の出来事」としてしか浮かんでこない。

地域福祉活動にやる気をなくしたつもりは全くない。やる気を起こせば、いくらでもやれるのがこの仕事だ。やる気があれば必ずやり方が生まれる。活動すれば、必ず仲間が生まれる。そんな新しい気持ちで生きていきたい。



# 連 専 福 だ よ り

## 専門員の動向

このたび、次の社協で専門員の交替がありましたので紹介します。

八女市	今井 光男(退 職)
諸富	信一(新 規)
豊前市	緒方 信夫(市役所へ)
襖田	修身(新 規)
小郡市	近藤 隆(退 職)
田中	泰輔(新 規)
新宮町	阿部 カヨ(退 職)
森	菊郎(新 規)
古賀町	藤本 省二(退 職)
夜須町	安部 初美(新 規)
手柴	五男(退 職)
石丸	智一(新 規)
田中	義男(退 職)

牛島 邦夫(新 規)
三橋町 石橋 鶴預(退 職)
森田 勲(新 規)
添田町 荒川 清治(退 職)
遠城 千尋(新 規)

以上の方々をよろしくお願いいたします。

## 会費の請求！

先日、専門員連絡会費を請求しましたが、各社協とも予算編成などで苦勞しておられるものと思います。この金は、各専門員の資質向上のため、ひいては、各社協の事業の活発化のために使用していますので、趣旨ご理解の上早目に納入していただきますようよろしくお願いいたします。

毎年、毎年三月になりますと、会費未納のところに督促をすることになっていきます。督促は世更の償還だけで済ませたいと思います。

## 雑 感

国際障害者年の第一年目の終わりに12月9日を「障害者の日」にするとうことが決まった。他には、「子どもの日」「敬老の日」があるが、これは何を意味しているのでしょうか、

子どもや老人のなかには、障害をもった人がいないとでもいうことでしょうか。それとも、障害者は独特の人種というものでしょうか。もし、国際障害者年というノーマライゼーションなるものに裏付けされた「障害者の日」

の制定であれば、むしろ「青年の日」や「壮年の日」を制定し、一人の人間の生涯の節目のなかで、この障害というものを間い直していくのが自然なよう気がします。なぜなら、障害というのは、程度の差こそあるにしても、だれもが障害をもってはいるからです。

## お ね が い

この「まなこ」を編集していて、いつも出てくるのが、原稿が集まらないということですが、いつでもいい、なんでもいいというのでは、いつまで待っても一つも出てこないということが結論のようであります。

そこで、今回は、タイトルをつけて募集しようということになりました。自分で書けるものをぜひ書いてください。

## ◎在宅福祉の光と影

—専門員の眼から見た—

◎国際障害者年のその後について

◎私の出会った人：自分を変えた人

◎社協を去った人の追跡レポート

## 本 音 の 世 界 へ

いま、専門員の間で、異色のグループができつつあります。それは「日の目」をみないグループ：実は「夜」のグループです。ある所では、五人の会またある所では六人の会というものです。地域では職員数が少ないので、話を聞いてくれる人がいないということ、専門員の中には、孤立するとい

人がありました。それではいけないので、専門員の勉強会など、話ができるようにとブロックごとにある程度公認された連絡会ができました。しかし、これだけでは足りず、夜の勉強会（酒も含んで）が繰り広げられてきています。他の方々も、本音が出せる小さなグループを作ってみてはどうでしょうか。

## 編 集 後 記

「まなこ」編集委員会とは、一体どういう存在なんだ。編集委員会であって、原橋作成委員会ではないはずだ。

頭では理解できていても、毎回の編集委員会が原橋作成委員会になってしまいうこのシレンマと、いらだち。

「もう愚痴はよそう。委員としての残された任期で、次回の「まなこ」だけは本当の編集委員会にしよう」と誓いあって別れた各編集委員の心意気をこの「まなこ」を読んでいるあなた、そう、あなたです！無にしないで下さい。原橋を送って下さい。

それにしても思うことは、前号に我楽多氏が書いていた「観ること」「専門性」についてであるが、我々もやはり編集委員としての専門性に欠けていたと、この時期になって自我の念となり頭に重くのしかかる。

砂人形